

Future

2019.January Vol. 77

2019年1月1日発行 八事日赤ニュース 77号

- 発行責任者/院長 佐藤公治
- 編集/名古屋第二赤十字病院総務課
名古屋市昭和区妙見町2番地の9
- 編集協力/HIP コーポレーション



名古屋第二赤十字病院

日本赤十字社

「安心」を支える、 地域医療。

◀ 特集ページ Special Report

断らない救急を軸に、
地域の病院や診療所と連携し、
急増する高齢患者を支えていく。

八事日赤を知ろう!
新たな専門外来を開設。

病気を知ろう!
骨粗鬆症性骨折
2019年
新年のごあいさつ

▶ 情報ページ

Message 院長 メッセージ ▶

現代のキーワードは「地域連携」「多職種連携」、地域でのチーム医療が重要です。
高度急性期病院も地域包括ケアの一員として、安心安全な街づくりに参画します。

Special Report

断らない救急を軸に、地域の病院や診療所と連携し、急増する高齢患者を支えていく。



私たちが果たす役割は24時間の救急医療と高度急性期医療の提供。

地域の医療機関が役割分担し、地域全体で患者を支えていく…。そんな地域完結型の医療体制づくりが進むなか、名古屋第二赤十字病院は地域の病院や診療所との連携体制の構築に力

を注いでいる。今春、地域医療連携センター長に就任した田嶋一喜（副院長兼心臓血管外科部長）に、どのような医療連携をめざしているのか、話を聞いた。

「基本的には、当院が地域で果たすべき役割を改めて自覚し、幅広く連携を広げていきたいと考えています」。同院の役割とは、何だろうか。「当院の伝統



ICTを活用し、待機の医療機関と情報を共有していく。

である（救急医療）と、高度で専門的な治療を提供する（高度急性期医療）の提供の2つだと考えています。こと救急においては、高齢者に多い誤嚥性肺炎（唾液や食べ物が誤って肺に入り、炎症を起こす病気）をはじめ、どんな救急患者さんも断らないことを柱にしています。当院が24時間の救急医療を実践することで、人材不足で夜間・休日の診療体制に苦慮している地域の二次救急病院をサポートしていきたいと考えています。しかし、救急患者でベッドが満床になれば、同院が本来、対象とする重症患者を受けられなくなり、高度急性期病院としての機能を発揮できなくなる懸念もある。「そうならないように、地域の病院と協議を進め、対策を練ってきました。現在では、時間外の救急患者さんの治療方針が決まれば、速やかに転院していただくような体制づくりをスタートしています」と田嶋は説明する。

患者のスムーズな転院を促すには、病院間の情報共有が鍵を握る。そのため、同院では、ICT（情報通信技術）の活用にも力を注いでいる。地域医療連携センター・副センター長の塚川敏行（内科部長兼医療社会事業部長）は、次のように話す。「平成25年に、やごとくロスネット（電子カルテ閲覧システム）



高齢になっても安心して医療を受けられるように、 名古屋第二赤十字病院が力を注ぐ、 地域医療連携の取り組み。

の運用を開始し、当院と連携を結ぶ病院や診療所と、患者さんの診療記録の共有を進めてきました。転院が決まった段階で、次の病院の先生方にカルテの情報を提供することで、患者さんに切れ目のない医療を提供できるよう努めています。実は塚川は、やごとクロスネットの立ち上げに携わった一人だ。「このシステム運用を始める際、どこまでカルテを開示するか、かなり議論しました。その結果、私たちは患者さんにより良い医療を提供することを第一に考え、ほぼすべての情報を包み隠さず開示することを決めました」と振り返る。

同院はまた、ICT活用の新しい試みとして、1年前からWEB予約システムも行っている。「WEB予約システムは主に、登録医の先生方を対象にしたものです。たとえば、患者さんをご紹介いただくとき、へこをしっかりと診てほしい」といった先生のコメントを添えて、WEBで予約していただくように働きかけています。ゆくゆくは、紹介状や検査データもWEBでやり取りできるようにするのが目標です」と、田嶋は言う。

医療連携のベースに 横たわる問題は、 急速な高齢化の進展。

同院が地域の病院、診療所との連携に力を注ぐ背景には、高齢患者の急増がある。「70代、80代の高齢患者さんが

増え、医療連携のカタチそのものが変わってきたように思います。以前は紹介された患者さんを治療して、紹介元にお返しする、という（一直線の連携）でした。でも、高齢者の多くは、在宅で急に病状が悪化し、再び病院に戻ってくるものが多くあります。そうした患者さんの流れをカバーするには、直線ではなく、（循環型の連携）が必要です。地域の多施設と協力し、循環型連携の仕組みを作っていく必要があります」（田嶋）。

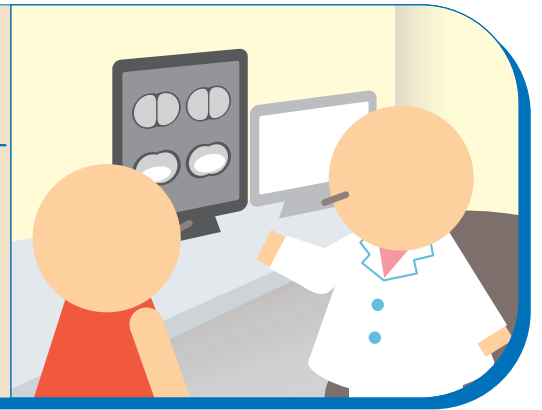
その言葉に加え、看護副部長の古城敦子は次のように語る。「高齢の方が増え、退院支援も難しさを増しています。独り暮らしだったり、認知症であることなどから、治療が終わってもすぐ在宅に戻れないケースが増えています。そういう方々をいかに支えていくかが、大きな課題ですね。当院では、患者さんの入退院を支援する患者支援センターと医療連携センターが常に情報共有しながら対応しています。が、医療だけの支援では足りません。医療機関や介護施設、さらに行政が一体になって取り組んでいかねばならないと思います」。

〈連携以上法人未満〉の 緊密なネットワークを 構築していきたい。

今後、ますます高齢患者の増加が予想されるなか、田嶋は「医療連携の質を高める」ことを目標に掲げる。「文書

だけの繋がりでなく、真の意味で顔の見える関係を築くことが、連携の質の向上に繋がると考えています。すでに、登録医の先生方とは、合同カンファレンスを通じて交流を深めていますし、近隣の病院とは、毎月のように、院長や事務長同士、スタッフ同士が顔を合わせ、連携の課題について討議しています。そうした意見交換の機会をもっと増やしていきたいと思っています」。

連携を深めるという意味では、近年、厚生労働省は地域医療連携を加速させるために、複数の医療・社会福祉法人などが参画して業務を提携する〈地域医療連携推進法人〉制度をスタートさせた。それについて、田嶋はどう考えているだろうか。「法人という形式には、こだわらなくていいと思います。ただ、その法人に近いような、結びつきの強い業務提携や活発な人材交流を図っていきたい。いうなれば、〈連携以上法人未満〉の緊密なネットワークを作りたいですね。そのネットワークを地域に張り巡らせることによつて、高齢の方々が在宅と病院を行き来しながら、安心して生活できるように支えていきたいと考えています」。世界でも例を見ない超高齢社会に突き進む日本。その未来を見つめ、田嶋達はさらなる地域医療連携の深化をめざしていく。



新たな専門外来を開設。

医学の進歩や高齢化などによって変化する医療ニーズに当院は応えています。

当院では、高度急性期医療を担う地域の基幹病院として、高度な専門医療を担っています。以下、その機能をより拡充すべく、今年度新たに開設した専門外来をご紹介します。

専門外来の受診をご希望される患者さんは、紹介状をご用意の上、事前予約をお願いします。

予約センター：052-832-1489(平日午前9時～午後4時30分)

■ リウマチ・膠原病外来

リウマチ・膠原病外来では、関節リウマチ・SLE・筋炎・強皮症などといった疾患をはじめとした、リウマチ・膠原病疾患を中心に診療します。

20世紀初頭の偉大な内科医ウィリアム・オスラーは「関節リウマチの患者が診察室に入ってきたら、後ろのドアから出て行きたくなる」と述べるほど、リウマチや膠原病疾患は治療困難な病気でした。

しかしながら、その後にステロイド・免疫抑制薬の適切な使用方法が整備され、また、ここ15年で生物製剤と呼ばれる関節リウマチを強力に寛解に導く薬剤も日常診療で使用できるようになりました。その結果、ほとんどのリウマチ・膠原病疾患は「普通の生活を問題なく送ることができる」レベルまでコントロール可能となりました。当院では、総合病院ならではの各専門科との連携にて、高レベルな医療を提供できればと考えています。

■ 髄膜腫の手術専門外来

髄膜腫は年齢とともに有病率が上がる腫瘍で、高齢化の進んだ先進国では生涯を通じて100人に1人が髄膜腫の診断を受けるといわれています。治療対象となる髄膜腫はサイズの大きなものや深部にできたものが多いことから、手術時にはしばしば大きな皮膚切開や開頭を要し、患者さんにかかる身体的負担は大変なものでした。また数年たつと開頭部位が大きく凹み、整容面でも心理的負担が生じてしまいます。

当院では、専門的な神経内視鏡手術チームが、10年以上前から髄膜腫の低侵襲手術に取り組んできました。現在では、従来の開頭手術だけでなく、3cm程度の小開頭手術(鍵穴手術)、頭を切らず鼻腔から頭蓋底部にアプローチする経鼻手

術など、複数の手術選択肢を提示できるようになっています。

外来では、個々の患者さんにとって最も確実で低侵襲と思われる手術法を考え、お話しさせていただきます。

■ 成人先天性心疾患外来

心臓外科手術や内科治療の進歩によって多くが成人に到達するようになり、成人先天性心疾患の患者さんは年々増加しています。また、平均寿命が長くなることで、成人期に症状が現れ治療を行うケースも増えています。そのなかで、後遺症や加齢の影響を受けて成人期特有の問題が生じ、これらが予後や生活の質に影響することがわかってきており、循環器内科、小児循環器、心臓血管外科の専門医による新たな協力体制が求められていることから、成人先天性心疾患外来の開設となりました。

当院では、成長段階に合わせて患者さん自身が病気をよく理解し、自ら主体的に治療に向き合えるように成人期医療への移行を支援しています。また、産科医療の充実や臨床遺伝診療科も兼ね備えており、先天性心疾患の妊娠、出産、就職等、生涯医療の観点から多職種による専門チーム医療を提供しています。現在、成人先天性心疾患の心臓外科手術、心房中隔欠損症・動脈管閉存症のカテーテル閉鎖術を行っており、質の高い総合力で当地域での主要な役割を担うことをめざしています。

■ ロコモ外来

高齢社会の到来で、介護を必要とする方が増えています。運動器障害が原因で移動能力が低下し、介護が必要になりそうな状態をロコモティブ症候群(ロコモ)と言います。運動器の障害としては、変形性脊椎症(腰部脊柱管狭窄症)、変形性膝関節症や、骨粗鬆症にともなう骨折などが多く見られます。健康な生活を長く続けるには、ロコモにならないような生活が重要です。今後、当院ではロコモ予防に対してさらに注力すべく、ロコモ外来を開設しました。変形性脊椎症・関節症・骨粗鬆症など運動器障害の評価、ロコモが進行しないような生活スタイルの提案、進行防止のための運動指導などを行う外来です。何らかの運動器疾患を有し、疼痛や歩行障害が出ている方が対象となります。

一歩ずつ、より良い医療をめざして。

地域医療のため、ひとつひとつの取り組みを
真摯に積み重ねていきます。



受賞 報告

地域の産科医療への貢献が 讃えられました。



平成30年9月10日(月)、東京都の厚生労働省中央合同庁舎にて、〈平成30年度 産科医療功労者 厚生労働大臣表彰〉の表彰式が開催され、当院の加藤紀子医師(総合周産期母子医療センター長)が表彰されました。厚生労働大臣表彰は、厚生労働大臣が都道府県知事の推薦のもと、長年にわたり地域のお産を支え産科医療の推進に貢献してきた個人・医療機関等の団体の功績をたたえるものです。

加藤医師はこれまで、地域の産科医療拡充に向け、さまざまな取り組みを行ってきました。ひとつは、平成25年に開設された〈やごと周産期ネットワーク〉構築への尽力が挙げられます。これは、地域の周産期施設と協同して妊婦さんの診療を行うためのもの。妊婦健診は地域の連携産科施設で行い、ハイリスクで高度な医療・専門的な医療が必要な妊婦さんを当院で診療することで、妊婦さんの通院・待ち時間の負担を軽減するとともに、連携をもとに適切な診療を行えるような体制をつくり上げました。

また、平成29年4月には、加藤医師をセンター長として、東海地区で初めてとなる〈周産期脳卒中センター〉を設立。妊産婦の抱える疾病リスクとして非常に高い〈周産期脳卒中〉に対し、24時間365日絶対応需の診療体制・システムを構築しました。

そのほか、周産期医療関係者に対し、標準的な母体救命法の習得を目的とする講習会の普及活動に努めるなど、多岐にわたる活動を展開。今回の受賞は、これらの実績が認められての結果となりました。

地域 交流

被爆ピアノの演奏会を 開催しました。

平成30年9月27日(木)、当院正面玄関エントランスにて、被爆ピアノの演奏会を開催しました。使用されたピアノは昭和13年製で、73年前に広島で被爆したもので、「このピアノは、平成10年、1番最初に私に託されたもので」と会場で話したのは、広島市在住のピアノ調律師、矢川光則氏。矢川氏は、現在6台の被爆ピアノを管理しており、平成13年以降、全国各地で被爆ピアノ演奏会を開催しているとのこと。今回の演奏会も、「被爆ピアノが平和の尊さを考える機会になれば」とのことで、病院慰問として開催されるに至りました。



矢川氏のお話の後、ピアノ演奏者の渡辺理紗子氏により被爆ピアノが演奏されました。曲目は、ショパンの「ノクターン」と「革命のエチュード」の2曲。「革命のエチュード」は、ショパンの故郷であるポーランド・ワルシャワが革命戦争の末陥落した、まさにその時期に作曲したといわれており、演奏者の渡辺氏によると、「悲しみや怒りを音楽に表現したのではないのでしょうか」とのことです。素晴らしい音色がエントランスに響き渡ると、会場に集まった患者さんや近隣の方々など、150名以上が聴き入りました。ピアノ演奏のあとは、アンサンブルSAKURAの皆さんと、歌手のまほろば遊さん主導のもと、会場の皆さんで「赤とんぼ」「里の秋」などを合唱。引き続き、瀬戸市在



住の長谷川兄弟によるピアノ連弾も披露され、会場全体で音楽を楽しむ心地良い時間となりました。

病気を知らう!

骨粗鬆症性骨折

日々の活動量を維持し、
骨密度を高めよう

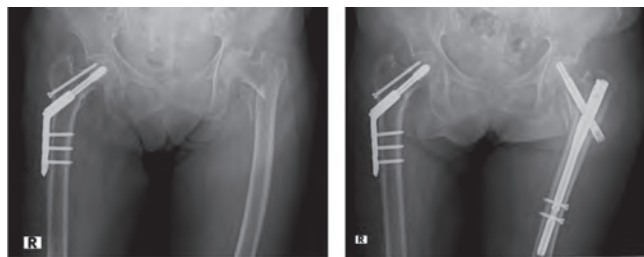
骨粗鬆症によって骨が脆くなると
軽い転倒でも骨折してしまいます。

骨粗鬆症性骨折とは、骨粗鬆症がもとになって引き起こされる骨折のことです。骨粗鬆症によって骨が脆弱になると、転倒などによる軽微な外傷でも骨折が発生しやすくなり、また健康な方に比べてよりひどい骨折に繋がることが多くなります。

骨粗鬆症は、女性ホルモンのエストロゲンの欠乏が大きく関係するため、閉経後の高齢女性に多いのが特徴です。ただ、若い頃の無理なダイエットや長年の運動不足が原因で骨粗鬆症になる方も増えており、国内で1,000万人以上の患者さんがいると推定されています。

骨粗鬆症と診断されるのは、骨密度測定装置により骨密度が70%以下という計測結果が出た方になります。最近では、病気の定義が若干変わり、転倒などの軽微な外傷によって

【治療例】87歳 女性
転倒で左大腿骨近位部骨折を起こし手術施行。
3年前、右大腿骨近位部骨折手術するも、骨粗鬆症治療なし。



圧迫骨折や大腿部近位部骨折が起こった方は、骨密度の数値にかかわらず骨粗鬆症と診断されるようになりました。

近年は新たな薬が次々と登場し
治療の選択肢が増えています。

骨粗鬆症性骨折に対しては、状況に応じて手術が行われますが、本質的には骨折の原因である骨粗鬆症の治療が必要になります。

骨粗鬆症の治療では、薬物療法が中心となり、そのなかでもよく使われるのが、骨が溶け出し弱ることを防止する「ビスフォスフォネート」です。ただ最近では、エストロゲンのバランスを調整する「SERM(サム)」のほか、「RANKL(ランクル)阻害剤」、「テリパラチド」などの新たな薬が登場し、以前に比べて治療の選択肢が増えています。

薬物療法と合わせて重要なのが、食生活の改善や運動療法などです。バランスの良い食事を心がけ、カルシウムの摂取とその吸収を促進する栄養を取ることが大切です。また、骨はある程度負荷をかけることで強くなるため、高齢になっても過剰な負荷にならない程度でできる限り活動量を維持することが予防に繋がります。

整形外科より

ここをチェック

院内外の密な連携により
患者さんを支えています。

当科には、多くの骨粗鬆症性骨折の患者さんが受診されます。そうした患者さんに対し、高度急性期病院として迅速な手術を実施できるよう、体制や機器を整備するとともに、リハビリスタッフや管理栄養士なども連携し、治療後の生活復帰をサポートしています。

ただ、骨粗鬆症の治療は、当院を

退院された後も継続します。そのため、病院・診療所を中心とした地域の医療機関が、連携して患者さんを支援する体制が必要です。当院では、連携パス(他機関をまたぐ治療計画)の積極利用、定期的な勉強会などを実施し、退院後も一貫した治療を行える体制整備に注力しています。

生活習慣を見直して
予防に努めましょう。

骨粗鬆症を予防するためには、日々の活動量を維持することが大事です。当院でもロコモ教室を開催し



整形外科部長 安藤 智洋

ていますので、ぜひこうした機会を利用し、骨粗鬆症にならない生活を心がけてください。また、定期的に健康診断を受けることも大切です。何か異変を感じたときにはお早めにお近くのかかりつけ医にご相談ください。

2019年“新年のごあいさつ”



院長 佐藤 公治

新年あけましておめでとうございます。今年は和暦の年号が変わります。平成の方にとっては、「昭和」は私が思う「明治」のように遙か昔でしょうか。今年の干支は猪。私は走るの好きですが心機一転、一人で走りすぎないように「猪突猛進」に注意します。

2018年4月に院長を交代し、早9カ月が過ぎました。毎日の流れが速く、危機管理に翻弄されそうになります。応援いただく皆さまに支えられ病院が成り立っています。本当に感謝いたします。

昨年も世界で多くの災害や人道危機が発生しました。当院からも救護班を国内外に派遣しました。南海トラフ東海地震など名古屋での災害医療を想定して、日赤愛知災害医療センターを新築します。災害時には日赤コマンダーとしての働きを持つ予定です。

昨年3月に受審したJCI(患者安全と医療の質向上を目的とした国際的な認証機関)においては、「カイゼン」と「ガバナンス(管理)」を学びました。3年ごとに更新審査を受け、常にPDCA(計画、実行、評価、改善)のサイクルを回して、地域の期待と信頼に応えるべく高度な医療と救急医療を提供していきたいと思えます。

現在の医療のキーワードは、「地域連携」と「多職種連携」です。一つの病院だけでなく、地域でのチーム医療をいかにスムーズに行うかがポイントです。地域に密着し、そして地域の一員として、八事日赤は安心安全な街づくりに貢献していきたいと思っています。

本年もよろしく申し上げます。

！ 地域とつながろう！

この地域を災害から守るために。

当院では、災害に備え、地域の皆さまの安全を守るべく、院内外においてさまざまな訓練を行っています。

院内では、毎年災害訓練を行っていますが、昨年(10月24日実施)は外部機関として電力・医療ガス・薬剤・医療資器材の企業さま方にもご協力いただきました。加えて、模擬患者として

愛知県立総合看護専門学校学生114名に参加していただきながら、傷病者のトリアージなど一連の訓練に励みました。

また、12月5～7日の3日間、日本赤十字社愛知県支部、豊田看護大学にて赤十字救護員研修が行われました。この研修では、救護活動に従事する愛知県内の赤十字施設職員が集まり研鑽を積んでいます。3日間を通し、さまざまなシミュレーション訓練や、愛知県警察ヘリコプターおよび愛知県防災ヘリコプターご協力のもと、ヘリでの災害負傷者の救急搬



送訓練を行うなど、非常に実践的な研修となりました。

当院では今度も、これらの訓練・研修で得た知見を積み重ね、災害時に迅速かつ適切な行動ができるよう努めていきます。

がんでお悩みの患者さん・ご家族の皆さまへ

〈がん相談支援センター〉が治療や生活の支援をしています。

その人らしい意思決定のために。

「治療や手術に不安がある」「医師から説明を受けたが、よくわからない」「仕事は続けられるのだろうか」など、がんに関するお悩みはありませんか？

当院では、地域がん診療連携拠点病院として、がん診療推進センターを中心に、医師・看護師・薬剤師など多職種が協力して、日々進歩するがん診療を安全かつ安心して患者さんに受けていただけるように努めています。

最前線の窓口である「がん相談支援センター」では、がん患者さんの診療や生活に関わる負担をできる限り減らすことができるようサポートを行っており、「認定がん専門相談員」の資格を取得した看護師、管理栄養士、薬剤師、医療ソーシャルワーカーなどが患者さん・ご家族の皆さまからのご相談をお受けしています。ご相談内容は、治療の選択について、主治医との関係について、緩和ケアについてなどさまざま。「がん治療は、患者さん自身やご家族が、正しい情報を得ることが非常に重要です」と話すのは、がん診療推進センターの室田かおる看護師長。「ホームページやブログ、SNS等を通じて、個人でも容易に情報発信ができる昨今、エビデンス(根拠)に基づいた情報かどうかを判断することが困難になってきています。その人らしい意思決定をするためにも、正しい情報をつかんでいただきたいと思います」。また、患者さんご本人とご家族の間での意向の違いや、患者さんのお子さんに対しての病状説明など困難な事例も生じるため、ご家族のみで相談いただくこともあります。

〈がんとともに生きる〉時代だからこそ。

治療や薬剤の進歩により、がんを抱えながらも社会生活を営むことができるようになり、患者さんごとで療養生活の個性が高くなっています。そんななか、当院が力を入れている取り組みの一つとして挙げられるのが、がん治療と就労の両立支援です。院内に相談窓口を設置しているほか、がん診療推進センターが事務局となり、医療者向けの講演会「がん就労を考える会」を実施。当院以外からも医師や社労士・キャリアコンサルタントなど多くの方々にご参

加いただいています。2015年以降、計6回の開催を経て雇用者側の方々にもご参加いただけるようになっており、次回はさらに規模を広げ、患者さんもお参加いただくフォーラム形式での開催をめざしています。他にも、患者さん同士が語り合い、交流を深める場としてがん患者サロン「ひだまり」や乳腺サロン「りあん」の開催、ピアサポーター(がん治療体験者)による相談会の開催なども行っています。さらに、今後一層患者さんへの支援を充実させるため、ピアランスケアにも注力しています。がん治療の影響で外見が変化してしまう患者さんに対し、各メーカーのウィッグや化粧品などを実際に職員が試用するなどして、メリット・デメリットも合わせて患者さんにご案内できるよう努めています。同様に、アドバンスケアプランニングや妊孕性温存についてのケアの確立も進めていきたいと思っています。がんとともに生きる時代において、当院ではこれからも、患者さん・ご家族それぞれが納得できる療養生活を送ることができるよう、さまざまな支援を続けていきます。



がん相談支援センター

【受付時間】 平日 8時30分～16時30分

【場 所】 患者支援センター
(1階正面玄関 入院受付横)

※ご予約なしでご相談いただけますが、場合によってはご予約になることもあります。

※患者サロン、就労支援などについてもお気軽にお問い合わせください。

本誌に**対**するお問い合わせ先 : 名古屋第二赤十字病院 総務課 TEL.052-832-1121



日本赤十字社

名古屋第二赤十字病院

〒466-8650 名古屋市昭和区妙見町2番地の9
総務課 TEL 052-832-1121 内線 51111